

幼い子ども2人を奪われ…

過失と殺人のはざまで

飲酒運転事故・遺族の叫び

▶▶ 1 ◀◀

飲酒運転のドライバーに子どもの命を奪われた親たちが「刑罰が軽すぎる」として、刑法改正を求め運動を進めている。業務上過失致死罪の最高刑は「懲役もしくは禁固五年」だが、そもそも故意に飲んで運転し、死亡事故を起すのは「過失ではなく殺人行為」という訴えだ。「飲酒運転は犯罪」という意識を社会に広げたいと願う遺族たちの叫びが、クルマ社会の法とモラルを考えてみたい。

（安藤 明夫）

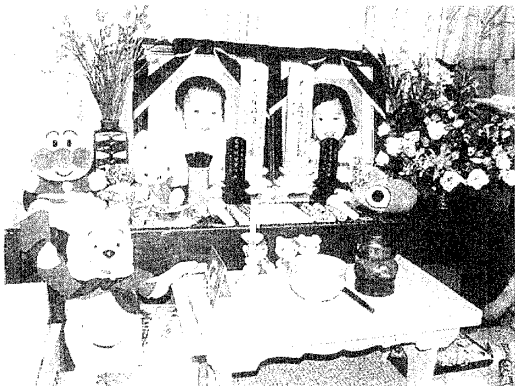
控訴

九月二十四日、東京都町 死罪の最高刑は五年です
田市のJR町田駅前。

千葉市の会社員、井上郁 飲酒事故・無免許事故へ
美さん（この声が拡声器か）の刑罰強化を求める署名の
ら響いた。

「私たちは、昨年十一 孝さん（左）と会社員も、
月、飲酒運転のトラックに 呼びかけ。傍って、夫の保
追突され、幼い二人の子を た、事故で大やけどを負
亡くしました。もしかした り、二度の入院を経て、リ
ら、あなたの大切な人も交 ハビリ中の日々。その胸に
通事故に遭うかもしれませ は、事故の後に生まれた三
ん。それでも業務上過失致 女典子ちゃんを抱かれてい

最高刑で「懲役5年」 刑罰が軽すぎる



2人の霊前は、花やぬいぐるみがいっぱいだった

た。十数人の仲間たちと一
緒に集めた署名は、この日
だけで四人分に達した。

☆ ☆
あの日から、一家の幸せ
な生活は戻ってこない。
昨年十一月二十八日午後
三時半ごろ、東京都世田谷
区の東名高速道路上り線
で、飲酒運転の大型トラッ
クが蛇行を繰り返した末、
渋滞の列に突っ込み、郁美
さん運転の乗用車に追突、
炎上した。助手席には保孝
さん、後部座席に長女奏子
（かなこちゃん）と、二
女典子（ちかこちゃん）
（こいすれも当時）がい
た。郁美さんは産床に入る
直前で、箱根に家族旅行に
出かけた帰りにた。

追突された衝撃で運転席
のドアが開かなくなった。
郁美さんが窓を開けて車外
に脱出し、後部ドアから子
どもたちを助け出そうとし
たときには、後部座席は炎
に包まれていた。保孝さん
は救出される際、もつろう
とした意識の中で「あちゅ
い」という奏子ちゃんの声
を聞いたという。

大型トラックを運転して
いた被告男性（左）高知県
中土佐町は、長距離運転
の際に十数年前から仮眠用
に寝酒をするようになり、
数年前からは昼食時にも飲
酒。この日も、ウイスキー
やアルコール飲料を相当量
飲んでた。

☆ ☆
郁美さんの心の傷は深か
った。今年一月に典子ちゃん
を出産、四月に職場復帰
したものの、事故前の仕事
の書類を見るだけで「あの
ころは二人が生きていた」

と涙が止まらなくなった。
周囲から「子どもを窓から
放り出せなかったの？」と
聞かれたり、「ご主人だけ
でも助かってよかったな
ど」と言われると、怒りと悲
しみが頭の中をぐるぐる廻
り回った。今も被害者支援
バムを拠拠所の被害に遭し
てもらうように託した。被
告は毎日、アルバムに手を
心を支える日々が続く。

六月、東京地裁は、被告
に懲役四年（求刑回五年）
に提出した上申書の中で、
飲酒死亡事故の加害者は、
懲役一年、一年六月の刑が
通常。被告の悪質さを重く
の、貞筆（し）な反角、
460。

☆ ☆
署名用紙の取り寄せなど
の問い合わせは、鈴木さん
方へ電046（251）6

立ち上がる親たち 刑法改正求め運動



刑法改正の署名を呼びかける井上郁美さん（手前）、保孝さん（中央）夫婦＝東京都町田市のJR町田駅前

見た判決だが、井上さん夫
婦には納得できなかった。
郁美さんは言う。
「法律の不備で五年しか
問えなかった、ということ
なら分かる。しかし、懲役
四年だと、二人の命を奪っ
てそれが妥当な量刑という
ことになってしまふ。五年
と四年では天と地の差が
ある。一日だって（刑期
を）引いてほしいはない」

飲酒運転事故で子どもを
亡くした遺族の仲間とも相
談し、担当検事に面会を求
めて気持ちを書き、最高検
察庁にも手紙を出した。そ
の思いに押され、東京地裁
は異例の控訴を決めた。近
く控訴審が始まる。

☆ ☆
被告の妻が四月末に謝罪
に訪れたとき、夫婦は、亡
くなった子どもたちのアル
バムを拠拠所の被害に遭し
てもらうように託した。被
告は毎日、アルバムに手を
心を支える日々が続く。

☆ ☆
署名用紙の取り寄せなど
の問い合わせは、鈴木さん
方へ電046（251）6